令和４年度　江戸川区立鹿本中学校　学校関係者評価　最終評価用報告書

学校教育目標	・自ら進んで学び　心豊かな生徒に育てる ・自ら考え、自主的に行動する生徒に育てる ・健康なからだと、気力にあふれる生徒に育てる	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	・基礎基本の定着を図る学校。社会に通用する規律を重んじる学校 ・正しいあいさつが、あたりまえに交わされる生徒。他を尊重しながら行動できる生徒。 ・生徒の個性を伸長できる教師。自らの行動に責任を持てる教師。
前年度までの学校経営上の成果と課題	＜成果＞・各授業でICTを活用した取り組みが、日常的に行われるようになった。 ・生徒の主体的な取り組みが、発表や行事などで見られるようになった。 ＜課題＞・生徒への相談活動を進める。　・デジタル機器を活用して校務改善を図り、教員の働き方改革に役立てていく。 ・分掌内の職務を精選し、担当者を明確化に努める。		

教育委員会重点課題	取組項目	評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価			学校関係者評価		来年度に向けた改善策
					取組	成果	成果と課題	評価	コメント	
いきいきと学ぶ学校づくり	確かな学力の向上	・7つの主な事業（取組）に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	・基礎学力定着と学習意欲向上を考えた学習コンテストを国語・数学・英語で実施する。 ・学習コンテストや定期考査前に放課後に補習授業を行う。 ・年間を通じて業者による数学の放課後補習教室を実施する。その際、対象生徒は教員より選出し、本人保護者の希望を取って実施する。 ・eライブラリ強化月間を設け、活用率を向上させる。	・学習コンテストでは3教科平均の合格率を80%以上とする。 ・全学年ともに補習授業を年35回以上実施する。 ・放課後補習教室への参加率を60%以上とできるように支援していく。 ・eライブラリ活用者が全校の80%以上を目指す。	A	A	・学習コンテスト3教科平均の合格率83%。教科によりばらつきがあるので、取り組む方法を再考していく。 ・補充授業3学年ともに35回以上をクリア。取り組む時期がバラバラなのでそろえていきたい。 ・放課後補充教室の参加率は75%。参加生徒の確保について工夫していく。 ・eライブラリの活用者国語26%数学91%英語62%。達成できたのは数学のみ、教科による違いが堅調に表れた。	A	・どの教科においても生徒の向上心が高まるような取組を期待したい。 ・補充授業は適宜取り組んでもらいたい。回数を満たすために集中しないようにして欲しい。 ・今後も区で用意している教材などを有効に活用してもらいたい。	・学習コンテストにおいては、教科による違いをなくなるように対応していく。 ・放課後補充教室については、教科に担当を任せ、対応していく。 ・eライブラリの内容を考慮すると教科による差が出て当然と感じられた。指導しやすい教科で、引き続き取り組んでいく。
	体力の向上	・「運動意欲の向上」に向けた取組の実施・改善	・体育授業における補助運動を毎時間実施する。 ・年間を通じて、雨天時の昼休みに学年ごとローテーションで体育館を解放する。	・補助運動の実施は、100%を目指す。 ・特別な事由がない限り100%実施する。	A	A	・特に問題なく実施することができた。	A	・休み時間などで活発に運動をするようにして欲しい。	・現状を維持していく。
	読書科の更なる充実	・読書を通じた探究的な学習の実施・充実	・1年時より計画的に取り組ませ、3年次で成果物として発表できるようにする。 ・行事に向けた事前学習を実施する際、区立図書館と連携し、関連書籍の借り入れなどを行う。	・成果物の完成80%以上を目指す。 ・図書の借り入れなど年間に複数回実施する。	B	B	・成果物については90%以上の者が完成。 ・都内めぐりが感染症の影響で、校外学習となったため、事前の学習の必要がなくなり、図書の借り入れがなくなった。	B	・3年生の成果物は良いものができていた。今後も期待したい。 ・図書館の蔵書管理は、データ化していくべき。	・3年間を見通した成果物となるように計画していく。 ・図書の借り入れを次年度は実施する。
	授業力の向上	・教育機器を活用した授業の充実	・すべての教科でICT機器や音響などの機材を活用し、生徒にとってわかりやすい授業を実施する。	・全教科ICT機器などの活用100%。	A	A	・どの教科においても授業でのICT機器の活用が実践できている。今後も活用場面を増やせる工夫と、従来の指導の良さも考えていきたい。	A	・ICT機器だけではなく、個に応じた指導も忘れずに進めてもらいたい。 ・人と人とのふれあいの中での指導も期待したい。	・継続していくが、ICT活用だけにとらわれないように注意していく。
	生徒の意見を取り入れた教育活動	・生徒の意見に真摯に対応し、生徒・教職員が一体となって教育活動の充実を図る	・様々な取り組みに対して生徒からの意見を聞き、多くのことを採用できる流れをつくる。	・行事や学校の取り組みに生徒の意見を取り入れたものをいくつか作り上げる。	A	A	・生徒の意見を取り入れる工夫を進めた結果、生徒から自主的にユニセフ募金への参加に向けた希望が出された。	A	・今後も活躍を期待したい。	・今後も生徒の意見を聞き入れられるようにしていく。
特別支援教育の推進	共生社会の実現に向けた教育の推進	・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流、交流及び共同学習の充実	・鹿本学園との交流を実施する。第三学年と生徒会役員会の交流及び本校行事への参加を促す。 ・巡回指導時や生徒に対する個別指導などをエンカレッジルームを活用して行う。 ・特別支援学級生徒のニーズに合わせた交流学習を実施する。	・交流は年間三回以上実施する。 ・エンカレッジルームの活用は年間を通じて行い、部屋の使用状況がわかるように表示する。 ・生徒や保護者との面談の上で年間を通じて実施する。	B	B	・交流学習は感染症の影響を受け、オンラインでの1回の取組となってしまった。 ・エンカレッジルームの活用が増え、別室登校に対する対応が見直されるようになった。 ・副籍交流は、文書の交換のみで進めた。	B	・鹿本学園との交流は、立地条件から言っても鹿本中が率先して行うものであると考えている。今以上の交流を期待したい。	・コロナ感染症の様子を見て交流学習を進める。 ・エンカレッジルーム、巡回指導室の活用を再度見直していく。
	子供たちの健全育成	・子供たちの健全育成に向けた取組の強化	・様々な問題や課題に対して、生徒からの意見も聞き子どもたちに見合った取り組みを実施する。 （SNS鹿中ルール、タブレットルール、校則見直しなど）	・生徒会役員を中心に投げかけ、生徒会役員から全校生徒に向けて発信、承認を取るようにする。特に生徒が直接関わるSNS関係やタブレット、校則の3点について必ず実施する。	B	A	・生徒会役員が中心となり、自分たちのニーズに合わせたルール作りを実践することができた。	A	・生徒の意見を聞き、実践していくことを継続して欲しい。それにより生徒が満足感、充実感を味わうことができる。	・継続していく。
学校と家庭、地域、関係機関との連携強化	学校関係者評価の充実	教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施・改善	・学校評議員会を学校公開に合わせ実施し、生徒の活動を直接目にしていただく機会を増やす。	・学校評議員会を年間を通じ、3回以上実施するとともに校内の行事をお知らせし、参観できる機会を増やす。	B	B	・開催時期が遅れたことにより、タイムリーな実施ができなかった。	B	・年間を通じて学校をサポートしていきたい。	・年度当初から対応できるように、計画を再考する。
	校則などの見直しについての検討助言	社会一般に広がる校則などに対する意見の集約 保護者・地域としての意見聴取	・アンケートなどを通し、校則などについての意見を保護者や地域関係者より聞き取り、変更の参考にする。	・年度内に試行期間などを設けながら、次年度より新たな取り組みができるようにする。また、生徒手帳への記載も変更する。	B	B	・変更を実施することを前提で進めるため、事前の試行期間を設けることにより混乱をきたし、実施が危ぶまれることを考慮し、事前試行は行わなかった。年度末の保護者会などで、周知していく。	B	・今後は標準服も変更も視野に入れ、検討していきたい。	・次年度以降は、標準服の変更も視野に入れ対応していく。
	学校やPTA活動の情報発信	必要時に学校やPTA活動の連絡を、学校ホームページ、連絡メールで周知	・学校からの連絡だけではなく、PTA活動の通知なども連絡メールや学校ホームページに随時掲載する。	・年間を通じて、各行事ごと適宜に配信を行う。	A	A	・副校長補佐の活躍により、例年以上に更新回数が増やすことができた。	A	・HPをさらに多く活用できるように期待したい。	・さらに向上できるようにしていく。
特色ある教育の展開	「学校における働き方改革プラン」	「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	・毎月一斉退勤日を設定するとともに、管理職自ら早めの退勤や休暇の取得を行っていく。	・毎月一回一斉退勤日を設ける。指導の状況によりその日にとることができないものについては、個々に別日に設定する。	A	A	・一斉退勤日を教員個々の事情により変更できるようにしたことが良かった。しかし、日頃から退勤時間が遅い者については今後も指導が必要。	A	・先生方に無理をかけないように進めてもらいたい。	・放課後の活用を見直し、今以上に教員の負担軽減に努める。
	教育相談活動の充実	生徒が多くの教職員に相談しやすい体制をつくる	・生徒が話したい教員を選出し実施する相談週間を設ける。	・生徒がアンケートに「学校に相談できる人がいる」と回答する値を60%以上。	A	A	・およそ80%以上の生徒が相談できる人がいると返答している。	A	・さらに相談活動を充実し、学校に登校するのが楽しいといわれるようになって欲しい。	・相談の機会を設け、相談できる人がいるの割合をさらに高める。